

聖書：創世記 12：1～9

説教題：あなたは祝福となれ

日時：2023年6月18日（朝拝）

これまで罪がどれだけこの世界の上に大きな力を振るうようになったかを見て来ました。最初の人間アダムとエバの子どもたちの間にはさっそく人類最初の殺人事件が起きました。神は人が心に凶ることがいつも悪に傾き、地が暴虐で満ちているのをご覧になって、ノアの大洪水により、地をおさばきになりました。それでこの世界は幾分でも良くなるかと期待されましたが、そうはならず、人々はバベルの塔の建設に見られるように一つに集まって神に反抗し、自分たちが神になろうと企てました。そこで神はこの世界がこれ以上、悪の力で一つになることがないよう、人々の言葉を互に通じないようにし、地の全面に散らされました。果たしてこのような世界に今後、どうい希望があるのでしょうか。神が何か手を打っても罪はまたそれをくぐり抜けるようにして力を発揮するだけではないのでしょうか。しかしこの世界には希望がありました。それは創世記 3 章 15 節で神が語られた原始福音、最初の福音です。神はやがて女から生まれ出る一人の子孫によってこの世界を救うと約束されました。その約束実現に向けて神が着実にみわざを進めておられたことが 11 章後半の系図に示されていました。そしてついに神の約束はアブラムの誕生とその生涯において新しい展開を見せることとなります。今回はその背景について見ました。アブラムの父テラはアブラムと孫のロトとアブラムの妻サライを伴ってカルデア人のウルを出て、ハランまで来ました。そこで父テラは死にました。そこで主の言葉がアブラムにありました。その召命の言葉が 12 章 1～3 節に記されています。

まず主はアブラムにこう言われました。1 節：「主はアブラムに言われた。『あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。』」一言で言えば、主なる神はここでアブラムを世とは違う道に行くことへと召されました。人類は皆、神から離れていました。アブラムの父テラも偶像礼拝者でした。そのようなあなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れよと神は言われます。これは世と同じ道を行かないということです。世と違う生き方へ踏み出すことです。どこへ踏み出すのでしょうか。主は「わたしが示す地へ行きなさい」と言われました。これは単にある場所へ行くという意味以上に、神を仰ぎ、神に信頼し、神に従う歩みに出発せよということです。神は全世界が神ご自身から離反する状況の中で一人を選び、この世と対立して、ご自身とともに歩む道、幸いな信仰の道、そして本来あるべき歩みへと招かれたのです。

この神の召しに従う先には何があるのでしょうか。そのことが 2～3 節に述べられます。そこで目につく言葉は何でしょう。繰り返し出て来る言葉は「祝福」という言葉です。5 回も出て来ます。祝福、祝福、祝福、祝福、祝福、と。神を信じ、神に従う歩みの先にはもちろん祝福があります。創世記 11 章までの記事では人間の罪のための呪いやさばきが支配的でした。しかしここに神は祝福の神であることがここで強調されています。神とともに歩む者を神は祝福されるのです。

そして私たちがここで心に留めるべきは神は国民を作ろうとされたということですが、神の頭にあったのはアブラム一人ではありません。彼から国民を作ろうとされました。これはこの世にある色々な国に加えてもう一つ別の国を作るという意味ではありません。神が作ろうとされたのは信仰の民です。神への信仰を第一の基礎とする国民です。これはアブラムにとってチャレンジとなる神のことばだったでしょう。彼の妻サライは前回見た通り、不妊の女でした。彼らの間に子はいません。そんな自分たちに向かって神は「わたしはあなたを大いなる国民とする」と言われます。これは数において多いことも含むでしょうが、それ以上に重要性において大いなる国民ということでしょう。この世界に他にはないユニークな国民、神が導く世界の歴史において非常に重要な位置を持つ国民ということです。そして「あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする」と主は言われます。11章4節でバベルの塔を作った者たちは、自分たちで自分たちの名を上げようとしていました。しかし主はそれを壊すことによって、自分で自分の名を上げようとするやり方は正しくないことを示されました。私たちの名を上げてくださるのは神です。そして「あなたは祝福となりなさい」と言われます。神の祝福が満ち満ちる国民となりなさいと。

3節前半は神の守りを約束するものです。「あなたを祝福する者を祝福し」とは、アブラムと彼に続く国民に神の臨在を認めて祝福する者を神は祝福する。一方、そこに神の臨在を認めず、呪う者を神は呪う。つまりそうして敵する者からアブラムとその民を守ってくださるといことです。

最後の3節後半に「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」とあります。ここにアブラムの召命における大事なポイントが述べられています。それはアブラムの選び、すなわち後のイスラエルとなって現れる民の選びの目標は全世界の祝福であるということです。神はただアブラムを選び、イスラエルという国民を起し、彼らを高く上げることだけを考えておられたわけではありません。彼ら神を信じる国民を通して全世界を祝福することこそが神のより大きな目的でした。端的に言うなら、神の関心は全世界にあります。ですから創世記10章では世界のすべての民族のことが覚えられていました。神はその救いのためにアブラムを始めとする信仰の民を作ろうとされたのです。この一大目的を覚えてアブラムと彼に続く民は自分たちの位置をわきまえ、この神の目的に奉仕する者でなければなりません。

さてアブラムはこの主の召命にどう答えたのでしょうか。4節に「アブラムは、主が告げられたとおりに出て行った」とあります。以前、ノアが「主が命じられたとおりに行った」と一言で、その従順が表現されていたことが思い起こされます。アブラムはこの時、75歳でした。子がない自分たちです。そんな自分たちから大いなる国民が出るということなどあり得るのでしょうか。しかしアブラムは主の約束を信じ、主の約束にすがって、信仰によって歩む人生へ出発しました。

そしてカナン地の地に入りました。3か所でのことがここに述べられています。まず

一つ目はシェケムです。ここはカナン地の中央にある場所です。このあとイスラエルの歴史で何かと重要な位置を占める場所です。モレの檜の木「モレ」とは「教師」とか「占う者」という意味のようで、おそらくカナン人の宗教における聖木がある場所だったのでしょう。主はここでアブラムに現れて「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」と言われました。直前の6節後半に「当時、その地にはカナン人がいた」と記されていました。ですからこれは信仰によって受け止めなければならない言葉であったこととなります。目の前にカナン人がいるのに、どうしてそんなことが起こるのでしょうかとアブラムは問いませんでした。むしろ彼は祭壇を築き、主を礼拝しました。つまり彼は神に感謝したのです。今すぐではなく、あなたの子孫に与えると神は言われました。その時は神に委ねて、神を信じ、神を礼拝したのです。

次に向かったのはベテルとアイの間です。これはシェケムよりさらに南に下った場所でエルサレムに近い場所です。そこに彼は天幕を張りました。つまりしばらくとどまったということでしょうか。そこでもアブラムを特徴づけていたのは祭壇、つまり礼拝生活でした。「主の御名を呼び求めた」という言葉は4章26節に出て来ました。カインと対照的な選びの系譜に見られる特徴として、そのことが言われていました。その敬虔な流れに見られる特徴がアブラムにも現れていたということです。

そしてその後、アブラムはさらに南に下ってネゲブの方へと行きました。ヘブロンの方です。こうしてアブラムは約束地の北から南までを歩きました。主がその地をくださるといふ約束を信じ、それらの地を歩き、信仰を告白しました。

以上の箇所は今日の私たちとどういう関係があるのでしょうか。ここはこの後のイスラエルの歩みばかりか、新約聖書でアブラハムの子孫と言われている私たちにとっても非常に重要な意味を持つ箇所です。以下の三つのことを心に留めたいと思います。まず一つ目として押さえないことはアブラムへの主の召命の言葉における「あなた」とは誰を指すかということです。もちろんここで直接的にはアブラムを指します。しかしこの主の言葉はその後、創世記の中で繰り返し出て来て、それらを参照するとアブラムだけではなく、彼の子孫をも指していることが分かります。たとえば22章18節で主はイサク奉獻の出来事後、12章3節の約束を繰り返していますが、そこでは「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる」と言っています。12章3節では「あなたによって」と言われていますが、22章18節では「あなたの子孫によって」と言われています。つまり「あなたによって」という主の言葉の中には「あなたの子孫によって」という意味が含まれているということです。もう一つ28章14節ではヤコブに対して同じアブラハムに対する約束が繰り返されていますが、そこでは「地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される」と両方言われています。ここからも今日の箇所の「あなた」にはアブラムばかりでなく、アブラムから出る子孫も含まれていることが分かります。

しかしその焦点はキリストであることを私たちは心に留めていなければなりません。今日の箇所で見るとアブラムの選びは創世記3章15節で語られた原始福音に基づ

くものです。主は創世記 3 章 15 節で、やがて女から出る一人の子孫によって人類を救うと約束くださいました。その約束を担う人としてアブラムが選ばれました。しかし彼が救い主なのではありません。ですから「あなたによって」とここで言われている「あなた」は究極的には彼から生まれ出るまことの救い主、イエス・キリストを指しています。そのことはガラテヤ人への手紙 3 章 16 節にはっきりこう書かれています。「約束は、アブラムとその子孫に告げられました。神は、『子孫たちに』と言って多数を指すことなく、一人を指して『あなたの子孫に』と言っておられます。それはキリストのことです。」そしてまたこれはキリストに結ばれる私たちにも当てはまる言葉でもあります。これはアブラムだけでなく、アブラムから出る国民全体にも当てはまる言葉であるように、まことの子孫キリストに結ばれる私たちも「あなた」という言葉の中に（二義的にではありますが）含まれることになります。

二つ目にアブラムに与えられた約束は主に土地と子孫に関わっていますが、これらは今日の私たちにどう関わるかということです。この後の創世記を読むと分かりますように、アブラムが地上の生涯で得た土地はわずかなものでした。妻を葬るため、しかも自分のお金で買い取った一片の墓地しか彼は持ちませんでした。後のヨシュアの時代にカナンの地を本格的に受け継ぐこととなりますが、それでもその支配は不完全、未完成であったことが同時に言われています。これらは神の約束が偽りであったことを意味しません。「土地」を与えるという主の約束は単なる地上のことではなく、天国の相続を指し示すものであったというのが聖書の主張です。ですからヘブル人への手紙 11 章 9～10 節、13～16 節を見ると、アブラムら族長たちが待ち望んだのは固い基礎の上に建てられた都で、それは天の故郷だったと書かれています。彼らはやがて過ぎ去る地上の土地ではなく、やがて神がくださる天国とそこにあるすべての祝福を受け継ぐことを見つめて歩んだのです。

では子孫に関する約束はどうでしょうか。確かにこの後、アブラムにイサクが生まれ、そこからさらに増えて行きます。出エジプトの際には数十万人と書かれています。しかしこの約束の成就是キリストにおいてであることを先に見ました。そしてガラテヤ人への手紙 3 章 7 節には「ですから、信仰によって生きる人々こそアブラムの子である、と知りなさい」とあります。ですからこれは単にアブラムの肉の子孫が多くなることを言ったものではなかったのです。やがてイエス・キリストを信じる真の意味での子孫が多く与えられることを指すものでした。そこにおいて空の星、海の砂のような多くの国民が与えられるという約束は成就することになります。

そして三つ目にここで私たちが心に留めるべき大切なポイントは、神の関心は全世界の祝福にあるということです。私たちは旧約聖書もこの光の下ですべて読まなければなりません。イスラエルが神によって起こされたのは全世界への証しのためです。イスラエルは世界に対する宣教師となるように召されたのです。この約束は新約時代に入ってさらに豊かに展開され、まさに全世界に福音は伝えられるようになりました。私たちが今、日本でこうして主を礼拝していること自体、このアブラムへの約束が真実に成就していることの一つのしるしです。

最後にこの究極的な成就の光景をヨハネの黙示録7章9～10節に見て確認したいと思います。「その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。彼らは大声で叫んだ。『救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。』」これはやがての天における大礼拝の光景を描いたものです。ここに確かにアブラムへの約束通り、数えることができないほどの大勢の群衆がいます。またその群衆は世界のすべての国民、部族、民族、言語を持つ者たちから成っています。またそこはまさに神がアブラムに約束された究極の土地です。そこには神の完全な支配から出るすべての豊かな祝福があります。そしてその礼拝の中心に子羊イエス・キリストがいます。神はこの最終ゴールに至るための具体的な最初の一步を今日の箇所で踏み出されました。アブラム一人を召し、あなたは祝福となれと言われました。しかしより大きな目的は全世界に神の祝福を届けることです。

アブラムに与えられたこの約束を真実に守り、ここまで実行してくださった主によって、今や私たちも神の民に加えられる祝福にあずかる者となりました。その私たちも一層ここに示された神の御心に生きるようにと召されています。私たちは続いてアブラムを導かれる神のお姿を創世記の内に読んで、信仰によって歩むとはどういうことかを学び、その信仰の歩みにより、「あなたは祝福となれ」と言われる神の祝福に豊かに生きる者とされたいと思います。そしてそれはさらに大きな目的を持っています。その神の目的を受け止め、この御心ゆえに神を賛美しながら、救いの光を輝かせ、主の大きな目的に仕える歩みへと進む者へ導かれて行きたいと思います。